

## どんな性の在り方も排除されないクラス・園・職場とは？

～子どもたちとの出会いから見えてきたこと～



セクシュアルマイノリティのこどもたちの居場所づくり

にじいろ i-Ru（アイル）

田中 一步 さん 近藤 孝子 さん

人権保育専門講座6は、にじいろ i-Ru の田中一步さん、近藤孝子さんに「どんな性の在り方も排除されないクラス・園・職場とは？ ～子どもたちとの出会いから見えてきたこと～」と題して、伊勢・名張・桑名の3会場でお話しいただき、53名の方にご参加いただきました。

### 1. はじめに

子どもたちのなかにいろいろな「性」を生きる子どもたちがいます。子どもたちがありのままの自分を生きられる場所をつくっていききたいと思います。子どもたちの居場所は学校・保育所・保育園・家庭などさまざまです。子どもたちが生きる場所が安心してありのままの自分を出すことができる場所であるために、まずはおとなに「性」は多様なものであるということを知ってほしくて活動しています。

### 2. ぼくの生い立ち —田中 一步さん—

#### ① 家族、地域に愛されて

ぼくの父と母は兵庫県のそれぞれ別の被差別部落で生まれ育ちました。

ぼくが小さい頃、おじちゃんやおばちゃんが家にやってくるのが度々ありました。ぼくは「おじちゃん、おばちゃん何しに来てんの？」と父に聞いたことがありました。父は「おじちゃんとおばちゃんは学校に行っていないから字が書かれへんのやで。だから自分が代わりに書いているんやで」とぼくに教えてくれました。6人きょうだいの末っ子の父以外は、家の仕事を手伝わないと生活ができず、学校に行けなかったからです。ぼくは小さい頃から部落差別について両親と話をすることがありました。

父と母はぼくたちが部落差別に遭ったとしても自分が生まれ育ったところを否定してほしくない、差別に負けない、差別を許さない子になってほしいとの思いでぼくたちを育ててきました。父や母だけでなく、地域の人や学校の先生が父や母と同じ思いでぼくたちにかかわってくれました。だから、ぼくは父や母をはじめ、地域の人に「たくさん愛されているな」と思って育ちました。



#### ② だれにも言えない3つの秘密

そのようなぼくでしたが、だれにも言えない秘密が3つありました。





1つめは、自分は女の子のからだで生まれてきたけど「なんでこの体なんやろう？ぼくは男の子やのに」と思っていたことです。2つめは、両親がつけてくれた名前ではなく、当時はやっていた「キャプテン翼」という漫画から主人公の「つばさ」という名前を自分につけていたことです。そして3つめは、自分は女の子として育てているのに、女の子のことが好きだったことです。

小学校の授業で黒板に示された体の図を見ながら、「男の子は女の子を好きになり、女の子は男の子を好きになる」ということを教わりました。また、日常生活の場面で出合うさまざまな情報は、体のかたちでその人の「性」は決まるというものが大半でした。

しかし、自分はそこには当てはまりません。こうした授業等からも「どう考えても自分はおかしい」と思うようになっていきました。家庭では女の子として、また姉として育てられてきたことによって、「やっぱり自分は変だ。自分みたいな人は、この世に一人しかいないにちがいない」と思っていました。だからこの3つのことは、大好きな父や母、またきょうだいや友だち、そして先生にも絶対に言えないぼくの秘密でした。



### ③ ぼくの小学校・中学校・高校時代 ～“社会で ぼくが生きていくために…”～

自分がおかしいのではないかというのを感じ始めたのは小学校5年生くらいからでした。

ぼくは高学年になると男の子にまちがわれることがありました。「ちょっとぼく・・・」と声をかけられることを「嬉しい」と感じる自分がいました。

中学校2年生の時、体育の授業で使う水着販売でこんなことがありました。「2年〇組の田中です。Mサイズください」と言うと、当時ボーイッシュな容姿だったぼくに、業者の人は男子用の水着を渡してくれました。その時、正直心のなかではめちゃくちゃ嬉しかったです。でも、ぼくは、隣にいた友だちに「ちょっと、これ、どう思う？わたし、女やっちゃうねん」と言ったんです。友だちは手を叩いて「またまちがわれたな、あんた」と言って笑ってくれました。ぼくも一緒に笑いました。本当の気持ちを隠して、自分が「おかしい」と思われないようにしたのです。

さらに、家に帰って同じように「こんなことがあってん。どう思う？」とわざわざ母にも話しました。すると母は、「かわいそうに。あんた女の子やのに」と言いました。ぼくにとって友だちや先生は大事だけど、それ以上に家族は大事な存在で、その家族に否定されることほど辛いことはないと思っていました。

女の子として育てられてきた自分は、大きくなればなるほど「友だちや親には知られてはいけない」と思い、本当の気持ちに蓋をして生きてきました。

## 3. 自分が100%でいられる人との出会い



### ① ぼくが赴任した保育所

ぼくには保育士になりたいという夢があり、保育士をめざすようになりました。その後進学し、保育士となって初めて赴任したのが地域に被差別部落のある保育所でした。その市では被差別部落の在る無しにかかわらず、どの保育所も部落問題について研修を行い、子どもたちの人権を大事にする保育を行っていました。ぼくはそこでたくさんの刺激をもらい、「保育って楽しいな」「保育って難しいな」と両方感じながら仕事をしていました。

そこで出会った先輩保育士からは、子どもの集団づくり、職員の集団づくり、保護者の集団づくりについて教わりました。4月に出会った子どもたちの集団を3月にはどんな集団にしたいのか、計

画を立て、とても丁寧に集団づくりに取り組む保育所でした。

ぼくは自分の生い立ちも伝えながら、思いや考えを話していきました。「部落差別がおかしい」ということを話せる職員集団だったからです。でも、自分のセクシュアリティについては、誰にも話せませんでした。

## ②「ひとりぼっちでしんどかったな」

その保育所に異動してきたのが、横にいるコンちゃん（近藤さん）でした。それまでも研修会などでは顔見知りの仲で、色々な取組を報告し合ってきたのですが、同じ保育所で勤めるのは初めてでした。

とても印象に残っている出来事があります。コンちゃんが5歳児を受けもっていたときのことでした。力の強さや口調の荒さから、ついつい「こわい子」と決めつけられていたYがいました。子どもたちどうしの決めつけにYは悔しさを感じていましたが、子どもたちだけではなく、実はおとなのなかにもYへの決めつけがありました。ある日、ベテランの保育士が園庭に落ちていた棒を拾って歩いているYを見かけます。そしてYに「またそんなもって。なにしてんの！」と怒ったそうです。事務所にいたコンちゃんのところにやってきたYは、「ぼくは何もしてないのに。すごいややった」と話しました。すごく悔しそうに話すYに、コンちゃんは「わたしが一緒に言いに行こか？」と言って、Yと一緒にベテランの保育士のところに話しに行きました。その時のぼくは、「子どもの気持ち、人権を大切にしている保育士になってる！」と思っていました。でも、ぼくは、子どもの気持ちより、「自分がS先生にどう思われるか」ということの方が気になっている自分いることに気がつきました。ぼくは、そこまで子どもの側に立ちきるコンちゃんの保育をすごいと思いました。そして、「あなたの保育がすてきやなと思っている」「あなたのような保育士になりたいと思っている」ということを素直に彼女に伝えました。



そしてその後、5年生の時から誰にも言えなかったぼくのセクシュアリティについても、自然にコンちゃんに話していました。これまでずっとひとりで考えてきたことを、ただただ聞いてほしいと思い、一生懸命話していました。自分のことを否定されない、排除されないと思える人には、話したいと思えるんやと感じました。



ぼくの話の聞きながら聞いてくれたコンちゃんは、「ひとりぼっちでしんどかったな」と言ってくれました。ぼくはその言葉で初めて自分が“しんどかった”ことに気づきました。5年生の頃からスイッチを切り替えることがあたりまえになっていたのに、しんどいと思えていなかったんです。「ひとりぼっちでしんどかったな」という言葉に、ぼくは涙が止まりませんでした。

## ③「排除」「否定」しない人だからこそ、自分のことを話すことができた…

その後、コンちゃんといろいろ話しました。最後にコンちゃんは「今、いちばんしたいことは何？」とぼくに尋ねてくれました。思いもしなかった問いかけに、ぼくは「男性物のパンツがはきたい」と答えました。たくさんしたいことがあるはずなのに、出た言葉はそれだったんです。そしたらコンちゃんが「明日、パンツ買いに行こう」と言ってくれました。

コンちゃんは、子どもでもおとなでも、その人が今何を思い、どうしたいと思っているのかを大事

にし、その人がやりたいと思うことを一緒にやろうとします。コンちゃんの保育を見て、「この人は絶対に相手を否定したり、排除したりしない」と思いました。そんなコンちゃんだからこそ、ぼくは自分のことを話せたんだと思います。

その後、ぼくたち二人は、いろんな人に出会い、いろんなことを学びました。そのなかで、「性は多様である」ということも知っていきます。そして、ぼくみたいな人たちのことをもっと知りたい、「性」について知りたいと思い、「性」とは何かを二人で調べる日々が始まりました。

## 4. セクシュアリティ(性の在り方)の4つの要素

### ①生物学的性:Sex(セックス)

性染色体、外性器・内性器の状態、ホルモンなどの要素によって決められる性。

### ②性自認:Gender Identity(ジェンダー・アイデンティティ)

自分自身の性をどのようにとらえているかということ。

### ③性表現:Gender Expression(ジェンダー・エクスプレッション)

身体の性にかかわらず、成長過程・社会生活のなかで後天的に身につけていく性のこと。「男らしさ」や「女らしさ」などの性別役割や、服装やふるまいなどの性別表現など。

### ④性的指向:Sexual Orientation(セクシュアル・オリエンテーション)

恋愛や性愛の対象となる性別のこと。

#### \* SOGIESC (ソジースク)

sexual orientation and gender-identity and expression and sex characteristics  
(性的指向、性自認、性表現、性的特徴の頭文字)

どんな性を好きになるか、どのような性を自認するか、どのような性表現をしているか、またどういった性的特徴を持っているかを表した言葉です。わたしたち一人ひとりそれぞれに SOGIESC を表しながら生きています。



#### 「性のありようは多様です」

- ・性自認(心の性)や性的指向(好きになる性)は、教育やしつけでは変わらない
- ・性別の認識がない人もいる
- ・ちがいを否定しないこと。どんな性も OK!
- ・見ためで勝手に決めない(見ためではわからない)

#### 「性は多様である」という視点から、保育・教育の点検を

保育の現場で貸し出すパンツが一枚しかなかったら?「あなた女の子(男の子)なのに、この男の子用(女の子用)のパンツしかなくてごめんね」と言うのか、「今日は選ぶパンツがなくてごめんね」と言うのか…。私たちはその子の「性」を決めることはできません。これまで「あたりまえ」と思って取り組んできた教育や保育について、性が多様であるという視点からみんなで見直したり点検したりすることが大事ななあとと思っています。

## 5. たくさんのともだちとの出会いから

### 《多様な性について考えることは、自分の生活を豊かにする》

ぼくたちは、性が多様であることに会ってから、社会で「あたりまえ」とされていることにどんどん引っかかるようになっていきます。「性が多様である」ことは、知れば知るほど深く、自分たちの生活を豊かにするものだと実感しています。



### 《社会が変わることが大切》

ぼくは、性が多様であることを知ってから、「自分を生きたい」と思えるようになりました。それまでは、人前ではスイッチを切り替え、本当の気持ちに蓋をして生きていました。でも、コンちゃんとの出会い、100%の自分でいられる場所ができました。すると今度は、家族や職場など、100%の自分を出せない場所が今まで以上に生きづらく感じるようになっていきました。社会には、「性は多様である」ことが理解されないまま作られた制度や決まりがたくさんあります。ぼくの場合、名前を変え、戸籍上の性を変えると、途端に楽になりました。でも、それは、たまたま「ぼくが望む生き方」が「社会のあたりまえ」に当てはまっただけで、社会が変わったわけではありません。今の制度や決まりのなかで、「社会のあたりまえ」に当てはまらない人はたくさんいます。やはり、社会が変わっていくことが大切です。

### 《ここにいるのに、いないものにしてきたのは誰？》

お母さん二人で、一人の子どもを育てている友だちがいます。二人は「自分たちの関係をオープンにできる保育所を探している」と話してくれました。そのときは「いろんな家族がいてあたりまえ。どこの保育所でも預けられないといけないよね」と返しました。でも、家に帰って、コンちゃんと話をしながらあることに気がつきました。よく思い出してみると、ぼくたちは「お母さんが二人」という子どもに出会ったことがなかったのです。今ふり返ると、出会っていなかったのではなく、出会っていてもオープンにできていなかったのだと思います。そして、オープンにできなくさせていたのは、ぼくたちです。ここにいるのに、いないものにしてきたのは、ぼくたちだったのです。

## 6. 子どもたちとの出会いから

### 🍀 乳幼児期から、お互いの気持ちを大事にする保育・教育を 🍀

ぼくたちは、たくさんの園や学校を訪問し、たくさんの子どもたちと出会っています。ある幼稚園で、「男の子で男の子の友だちが好きです」という人がいることを伝えると、5歳の子が「きっしょー」と言いました。「何が気持ち悪いの？」と聞くと、「だって、男の子が男の子が好きって気持ち悪いやん」「ふつうは男の子は女の子が好きになるやん。ぼくは男の子やから女の子が好き」と教えてくれました。他人のことを「こうでなければいけない」と決めつけてしまうということが、すでに5歳から始まっているのです。小さい頃から、子どもたちの生活のなかで、お互いの違いを大事にできるような声かけや取組をしていくことが大切だと思います。

## 「性」は、自分自身が決めるもの

中学生ぐらいになると、学習を通じて「LGBT」などの言葉を知っている子が増えてきます。でも、その言葉を人を傷つけるために使ってしまう子があります。また、「あいつはレズビアンだ」などと、他人の性を勝手に決めつけてしまう子もいます。性は、他人が勝手に決めることはできません。そのことを、ぼくたちは、子どもたちに伝えています。

## 「ふつう」なんて「性」はない…「性」について、正しく知ることからはじめよう

自分のことを「ふつう」だと言う子があります。その子は、LGBTではない自分のことを「ふつう」と呼んでいるのです。これは、とても恐ろしいことです。性にかかわる言葉は、LGBTに限らず無数にあります。「LGBT」が「ふつう」かということではなく、一人ひとりが自分のことを何と呼ぶことができるのか、深く知ってほしいなと思います。

## 7. 『じぶんをいきるためのるーる。』

コンちゃんが絵本「じぶんをいきるためのるーる。」を読み聞かせてくれました。

### 〔絵本〕「じぶんをいきるためのるーる。」 田中一步：著

一步さんが自分を大切に生きるために決めている6つのルール。“あたりまえ”とされるルールのなかで息苦しい日々をすごしている子どもたちに、「おかしくなんかないよ」「ひとりじゃないよ」と伝えたい。すべての子どもに「“じぶん”でいいんやで」というメッセージを伝えたい。そんな一步さんの思いが込められています。



僕たちの話に、子どもたちはたくさんの感想を書いて返してくれます。「はじめて知ったこと」「話を聞いて自分の考えが変わったこと」「自分のセクシュアリティのこと」「自分の悩み」など、ぼくたちの話に“自分のこと”を返してくれます。そのなかには、本当にしんどい思いを抱えさせられている子どもたちの姿もあります。

ぼくたちは、決して「性の多様性を伝える講座」をしているつもりはありません。「性の多様性をとおして、何を子どもたちと考えていくのか」が大切だと思っています。性は、すべての人にあるものなので、自分に重ねて考えやすい反面、社会にある「あたりまえ」が根強いいため、他人事になりやすくもあります。それでも、性を考えることをとおして、自分のことを考えたり、友だちの気持ちを想像したり、存在を否定されている人がいないかを考えたりできると良いなと思って話をしています。まずは、小さい頃から「性は多様である」ということをあたりまえに身につけていくことが大切です。保育や教育の役割はとても大きいと思います。



## 参加者アンケートより

- ◎ふと自分自身をふり返ったときに、あらためていろんなこと、物、人に対しての根深い差別意識があることに気づかされました。言葉では、人に寄り添うとかありのままを受けとめる…なんて使っていますが、本当はどうなんだろうか…。日々の生活の中で、常に自分自身と向き合っていくことの大切さを感じました。
- ◎中学生の時に同性どうしが付き合っているという話が耳に入り、「え！ふつうじゃない」と思ってしまった自分がいました。それは、性のことについてまだ全然分からなかったからです。おとなが子どもたちに無意識にかけている言葉や行動が、子どもたちの中で決めつけにならないよう意識することが大切だと感じました。
- ◎子どもに対するかかわり方が変わるような気がします。自分の中で決めつけた話し方をしていたんだと反省しています。人の思いに寄り添うということは、自分の思いに寄り添うことだと思いました。子どもの心の声を感じていけるおとなでありたいです。
- ◎自分を否定されたくないから、思ってもいないことを言ったり、周りに合わせてしまうことが多いなか、自由でいいのだと思うと、少し楽になりました。保育をするなかで、子どものことを勝手に決めつけていないだろうか、自分のことを言えない環境をつくっていないか、今からでも意識をして、保育や職場の人、自分のまわりの人とかかわっていきたいと思いました。
- ◎コンちゃんが、Ｙちゃんと一緒に先生にお話に行くところ、涙が出そうになりました。性は多様、子どもやまわりの友だち、仲間、安心して話せる関係、今日のお話を私のまわりの仲間、家族に伝えたいです。
- ◎子どもたちの純粋な感想に感動しました。自分は自分、自分のことは自分で決めていい、全部まる……。目の前にいる子どもたちにそう感じてほしいと思います。
- ◎人と同じであることに、とっても安心感を感じていて、違うことに不安になることも私自身がすごくあります。でも今日の話で、子どもたちには違っていても自分のことを受けとめられる安心感のなかで成長して行ってほしいと強く思いました。自分の当たり前を押しつけてしまう自分、普通をいつの間にか求めている自分をふり返り、子どもたちが、職員が、自分のことを話したいと思える園になるよう、職員と話していききたいと思います。
- ◎ずっと性の不一致など、自分の性の悩みや何か違和感を感じている子を救わなくては！というおこがましい想いばかりでした。今日のお話を聞き、すべての生き方、すべての人に対して、そのままで大丈夫と伝えていききたいと感じました。